
呉田間駅周辺にて 怪事

山波太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呉田間駅周辺にて 怪事

【Nコード】

N8142M

【作者名】

山波太郎

【あらすじ】

夏のホラー2010参加作品

金子圭太の携帯電話が鳴りだしたのは、夜の折り返し、日付が変わるちょうどそのときのことである。その携帯電話を開いて画面を見てみると、そこには「金子将太」と出ていた。この将太というのは、金子圭太の二つ下の弟で、一年前に実家を出て、その実家から車で三十分ほどの町にあるアパートに住んでいる。田舎ではよくあることだ。その弟から電話があった。

「もしも将太？　どうかしたか」

この時間、将太から電話がかかってくることは珍しい。なにかあったのだろうか、と圭太はそう当たりをつけて電話にでた。

『兄貴？』電話越しに聞こえる将太の声はどこか落ち込んでいるようだった。『今ひま？』

「ひまか……って？　ひまだといえはひまだよ、なにかあったか？」

『いや……うん』明らかに歯切れが悪い。『ひまなら……ちよっと手伝ってほしいんだ』

「なにを？」圭太は少し笑いながら訊いた。

こんな時間に何を手伝うというのだろう。少なくとも、何か事件というわけではなさそうである。圭太が笑ったのはその安堵のためである。

『着いてから話すよ』将太はなおも暗い調子を崩さない。

圭太はしぶしぶながらそれを了承して、代わりに場所はどこかと訊いた。するとその弟は呉田間駅のすぐ近くだと答えた。

『いつ来る？』将太は訊いた。

「いつ……んー二時間はかかるぞ？」壁にかかった時計を見ながら答える。

どうしたってそんなところに行ったんだ？　と圭太は思ったが言及はしないようにした。弟にだっっているいろいろあるのだ。「構わないか？」

構わない。将太はそう答えて、それから圭太は電話を切った。

半年前にバイパスが通ったので、その場所まで行くまでのストレ
スはそれほどかからなかった。道が大きい割に、やはり田
舎道なので車の交通は自分を除き皆無である。圭太は弟の言った、
その呉田間駅まで予測よりも三十分ほど早く着いた。

呉田間駅は無人駅である。もちろん人影はない。圭太は車から降
り、外を見渡した。夏の熱気が車内の冷房になれた圭太をだるく包
む。

駅の近く……ってどこにいる？

そこら一辺の光源は、乗ってきた車のライトを除けば駅の街灯、
それだけである。それにしたって変色して明度が落ち、時折電氣的
な音を立てる。機能的な寿命はとくに過ぎていようだった。

携帯。

ポケットの中にある携帯電話をつかんだ。将太に連絡を取ろうと
したのだ。しかしそれと同じくして、圭太は光の点滅を認めた。こ
こから少し離れたところからモールス信号のように光っている。そ
れを将太の車だと圭太は直感した。

車で行くほど遠くはない。圭太はそう判断して、心持ち急いでそ
の光の方へと歩いて行った。

その距離が近くなるにつれ、光を発するものの輪郭が闇に浮かび
上がってきた。低い車体、色は黄色。やはり将太のスポーツカーだ
った。

大方溝に嵌ったんだらう。

圭太の頭の中はすでにその答え一択で埋まっていた。そのところに
はすでに将太の電話での暗い調子を忘れていた。

「大丈夫か？」

まだ距離を残して圭太は訊いた。そのころ、将太の車のヘッドラ
イトは完全に切られていた。場所を教えるのが目的なのだから、そ
れはおかしくない。

圭太がおかしいと思ったのは将太の態度である。寸前まで近づいても、将太は一向に車から出てくる気配がないのである。

ここまでできてようやく、圭太は一時間半前の、将太の様子を思い出した。

どうした？

とうとう運転席の横まで歩いてきてしまった。

「おい」コンコンとドアのガラスをノックする。

中の弟はその運転席に、なぜか体操座りで頭を抱えていた。本当にどうしたのか。事態が自分の思っているよりも幾分悪いのだということを圭太は予感する。

「おい！」今度は先より強めに叩く。「将太！」

弟の名前を呼ぶと、その弟はようやく反応を見せ、ドアガラスを下げて兄を見た。

「兄貴い！」顔は泣きそうだった。

いや、今ようやく泣きやんだところのようだった。その顔に兄は面食らう。快活な弟の泣き顔なぞ、十数年見ていないものである。

「いや、あの」圭太は言い淀む。「お前、どうした？」

「ひと……」将太はひとつ唾液を飲み込み、止んだ涙をまた溢れさせていった。「ひとお……ひいちゃったよお」

「人！？」圭太は信じられないような顔をする。「人を……なんだって？」

「轢いちゃったんだよお……」

「轢いた！？ ちよっ！」

圭太は言葉がでなかった。事が自分の想定した範疇になかったからだ。考えてもみない最悪の事態だ。

「で、その 人は！？」

どこだと圭太は訊いた。

将太は口に出さず、運転席から左斜め ずっと後方を指で差した。圭太はそれを答えと受け取り、その指さされた方へ駆けて行った。

差された先は道ではなかった。土手があり、その下は水田である。道路よりレベルが低く、見下ろす視界は暗闇だった。どうやったって見えそうにないので、先ほど出し損ねた携帯電話のライトで辺りを照らした。

あつた。いや、いた……！

真つ赤　血だらけだと思つたが、それはよく見ればドレスだった。女だろう　顔はよく見えない。それどころか、四肢はどれも水田の泥に埋没しているようだった。行きたくない。そこに行きたくない。気味が悪い。圭太を戦慄させるリアルがそこに横たわっている。

救急車。

浮かんで、すぐに車にとつてかえす。

「救急車は　呼んだんだろ？」

兄の質問に弟はただ無言だった。

「呼んでないのか！？」圭太はいきり立った。「どうして呼ばない！　人を一人　轢いておいて！」

「無駄だと思つたんだ！」兄に合わせて弟も激高する。「だって、すごい勢いでぶつかったんだよ？　すごい飛んだし！　もう助かりっこないって思つじやん！」

「だからってお前は！」ここで兄は一気に冷めた。

今はまずやるべきことがある。

「いい。俺が今からでも救急車　呼ぶから」携帯電話を開けて番号を押す。

一、一、キユ　。

「やめてよ！」弟はその携帯電話を窓から奪い取った。

「　お前！」

「弟を、弟を犯罪者にしたいの！？」

圭太は　自分の弟がいつたい何を言っているのか分からなかった。その弟は続けて捲し立てる。

「救急車っていうのは生きてる人を助けるためのものでしょ？　俺

が撥ねたのは二時間以上も前なんだよ？ もう死んでるよ！ だったらもう呼ぶ意味なんてない！ 呼ばなくていい！ 呼ばないで！」

圭太はその言葉に唾然とした。しかしもう死んでいるということはずでに確定である。確認するまでもない。いや、遠目からでも確認できる。事故の様子は知らない。しかし二時間、顔を泥に埋もらせてなお、生命活動を続けられるはずがない。すでにあれば死体である。

だったら。

圭太はその頭で考える。

「なんで……俺を呼んだ？」

自然と口に出していた。その思考は徐々に、しかし急激に回転数を上げていく。俺を呼んだときの言葉　ここに来てからの将太の言動　。

「まさか　将太お前！」

犯罪者になりたくない弟は力なくにやりと笑った。その顔が言う。

バレなきや……犯罪者じゃない。

圭太は二つ目の戦慄をその顔で覚える。

やっていいはずはない。はずがない。

でも。

弟を売るわけにはいかない。

だったら。

やるしかない。

幸いここは人影はおるか人家もない。辺りはすべて　アスファルトと水田だけである。

「どうすれば……どうする……つもりだ？」兄は震える声で弟に訊いた。

遠くの方で雷が鳴り出した。

「簡単だよ？」弟が言う。

すでに常軌を逸した目をしていた。しかし兄はそれに驚きはしな

かった。

「要はさ」弟が答える。「隠しちゃえば……それでいいんだよ」
難しいことは知らない。弟はそう言った。

「違う」兄はそれを否定した。「隠せばいいのは分かる。誰にも見られていないんだから、それはそれでいい。問題は」
どこに隠すか、だ。

「それは……」弟はその場所を考えてなかったらしい。

馬鹿が。

兄はその萎れる弟の顔を見て、そう思った。

「とにかく今は」兄は言った。「死体をどこか 別の場所に移す
ことが最優先だ」

降りろ、と兄は言って、弟を車から降りさせた。

「移すってどこに？」

「ここじゃなきゃどこでもいい」土手を下りながら兄は言った。「
急げ、もうすぐ雨が降る。そうなるといういると残しちまう。雨が
降るのは 俺たちがいなくなってからだ。そうすれば何も残らな
い。全部流れてく」

分かったか、という兄の念押しに弟は愚直に頷いてみせた。

「お前が先に行け」水田に入れと兄は弟に命令する。

「なんで？」弟はなんとも情けない顔を兄に向ける。

「なんで……だと？」兄はそれを蔑んだ。

「分かった……うん。先に行く」そう言って弟は靴を脱いだ。

弟が水田に足を一步、二歩と踏み入れていく。その背中を覗みつ
けてから、兄はそれに続いた。

そこはまさに暗闇だった。月明かりさえもない。その中を二人、
ぐちゃぐちゃと泥を混ぜ繰り返しながら、幾らかを歩く。その数歩
でさえまともに歩けない。

チクリと厭な感触が圭太の足の甲を襲った。

蛭か。

そのおぞましさを思い出す。子供のころ咬まれて、もう二度と咬

まれまいと思っていた。それが。

「チッ」

弟に聞かれないよう、最小限の音で舌打ちをする。圭太は将太のことを疎ましく思い始めていた。

どうしてこんなことになったのか。

すべては明らかにこいつの所為。圭太は前に行く将太の背中を見てそう思う。しかしそれも　すでに後の祭りである。

暗闇の中、それでも気味悪くテラテラと光る轢死体を認め、傍まで歩いた。こうして注意深く見たところで　当たり前だが　呼吸している気配はない。

やはり死体。

圭太はその思いを強くする。もう、助からない。ため息をひとつして、将太に、一緒に車まで運ぶ旨を伝えた。なるべく死体を見ないようにうつ伏せにある体の向きを仰向けにする。

圭太は脚部を持った。両の足を、ちょうどリアカーを後ろ手に引いて歩くように　そう持った。弟は上半身を任された。

そのように持たないと、傾斜が六十度以上ある土手は登れない。後ろや横を向いた状態では登れないのだ。だからこの姿勢を取るのには、その意味で意味当然の帰結である。　が、圭太にはもうひとつ、わけがあった。やはりその死体の顔　表情　瞳を見るのが

厭だったのである。女々しいとは思う。が、どうしても厭だった。逆に弟は見なければいけない。轢いたのは弟である。だから、その罪を自覚しなければいけない。だから弟に上半身を任せた。

しかしそれは詭弁だと、兄は自覚していなかった。

その轢死体を車まで運ぶのには、かなりの時間を要した。やはり不慣れた姿勢で急勾配を登るのには無茶がある。確かにそれは原因のひとつではある。しかしそれよりも、その死体の柔らかさが、時間のかかった要因としては大きい。死後硬直というものがあるのではないのか。圭太は思ったが、よく分かるはずがない。死体など運んだ経験がないのだ。

弟の車を目前に見据えて、こんなもの　なのだろうと、無表情にそう思った。

とにかくこれで……。

なにひとつ終わったわけではないが、ひと段落だ。兄と弟、ともに思った。

そうして弟の黄色いスポーツカーに乗せる。しかしそこで異変に気づいた。気づいたのは弟である。カエルのような、短い悲鳴を上げて、

「兄貴！　兄貴！」と兄を求めた。

「なんだ？　どうした？」うんざりしたような兄の声が上がる。

事実、うんざり　ではあっただろう。

その兄の調子を無視し、弟はさらに声高に叫ぶ。

「こいつ　こいつ！」だからどうしたと兄が訊いた。「首が

頭が　！」

ない！

言われたところで、ようやく兄は振り向いた。そして死体を見る。その死体に頭部は確かになかった。

「お前　！」次に兄は弟を見る。「どうして気づかなかった！」

当たり前の反応である。弟が担当したのは上半身で、そのことに気づいて然るべきことだった。

「だって　だって！」弟の弁解は、死体と兄　両の恐怖で泣きそうなものになる。「俺、怖くて　目え瞑ってて　！」

馬ッ　鹿！

兄は弟にこぶしを握って突っ掛かったが、今はそれよりもやるこがある。カんだこぶしを納めて車を降りた。

「探すぞ！」兄はまだ降りかけの弟に向けて言った。

ここで弟が間抜けなことを訊くようならば、今度こそぶん殴つてやろうと思っていたが、それには及ばなかった。

轢死体の元あった場所　そこへ急いで戻り、二人してその周辺を隈なく探す。視覚に頼れず、触覚にて探す。両の手で泥をかき集

め、脚を伸ばして泥を蹴り　まさしく手当たり次第に死体の頭部を探した。　　が、見つからない。

五分探した。十分探した。そのうち雨が降り出した。

「見つかったか!?」兄は少し離れた弟に訊いた。

「見つからない!」弟は答えた。「そつちは!？」

「ないに決まつてるだろ!　ボケ!」

兄も弟も必死である。

見つからない、見つからない!

くそ、くそ、くそくそ!

ピシヤリと雲が雷鳴を轟かす。雨が一層激しさを増す。

そんな折り　　。

ガチャリ　車のドアを開く音が聞こえた。篠突くような雨の音

その最中でも確かに聞こえた。

なんだ……?

兄は弟を見た。そして弟は　それを見た。

「あ、あ、あ、あ　」弟は体ごと収縮している。「兄貴い!」

兄はそれに答えず、ただゆっくりと　それを見た。暗闇のはず

なのに　月明かりさえ出していないのに　それはぼんやりと、そ

れ自身光っているように、圭太　兄の脳髓へ目を伝って入ってき

た。

なんなんだよ!

ついに兄も泣きそうになる。

なんなんだよ!

体の震えが止まらない。

なんなんだよ!　どうして　　。

首がないのに　動いてんだよ!

今まで経験したことのない戦慄が二人を襲う。首　頭部がない

体が、頭部のないままに歩いている。歩いて　こちらに向かつて

きている。

「わあああああああ!」

最初に発狂したのは弟だった。それに続いて兄も同じく発狂した。二人は水田を伝って　それを避けるように　兄が乗ってきた車に走った。

あれを生きているとは思えない。首がないのに　生きていていはずがない。でもあれを死んでいると定義するのは間違っている！

じゃあ、あれはいつたい　？

弟はいつたい何を轢いた？　圭太は車へ走る最中、そんなことを考える。しかしそれはどうでもいい。この状況においてどうでもいいこと。

息なんてものは忘れて、それでも二人はなんとか兄の車へとたどり着いた。たつたひとつの街灯に浮かび上がるそれは、なんとも頼れる絶対空間のように感じられた。兄は運転席に乗った。弟は運転席に乗った。

あれは……？

走って来ている。暗闇の中、やはり浮かび上がって輪郭をはつきりとさせながら　走って　くる！

「兄貴、兄貴！　来てる！　来てるよ！」弟が叫ぶ。

「分かつてる！　分かつてるから！」

黙ってる！　兄は震える手で鍵穴にキーを差しこもつとする。なかなか差しこめない。そうこうしているうちにどんどん距離がなくなる。

「来てる、来てる、来てる来てる！」

弟が喚く。

分かつてる！　ジリィと擦った音を立ててキーが吸い込まれる。

よし！

後は　。キーを回す　かからない。キーを回す　かからない！
い！

どうしてだ！

分らない。

それでも距離が詰まってい

「兄貴！」

弟がうるさかった。

元はと言えば！

お前が！ ハンドルを握る手を横 弟の胸倉へ。そしてつかんで寄せる。

お前の所為で！

しかし弟が殴られることはなかった。なぜか兄は躊躇していた。理由は知れない。それは一瞬の間。刹那は刹那。

ゴトン 今度はフロントガラスで音がした。前方に見えるは小さい玉のようなもの。それがヘッドライトに照らされて全様を現わにする。

それは女の頭部。それがさかさまに浮いている。それが不可避な速度で近づいて。

ゴトン！ とフロントガラスにぶつかった。

「わあああああああ！」

今度は二人同時に飛び出した。外に出て向かう先は、弟の黄色いスポーツカー。走ってくるそれを避けて 先ほどと同じようなルートを取って二人走る。

かかるのか？

両方がそれを思った。エンジンである。兄の方はかからなかった。だったら弟の方も。いや、現状においてそれに縋るしかないのである。走って逃げても、どこまでも追ってくる。それを二人は直感していた。

だから二人は車へと走る。逃げるために 走ってくるそれに体を向ける。それはすぐに背後へと変わった。驚くべきほど簡単だった。しかし二人に驚いている余裕はなかった。驚くというのなら、もう充分に驚いている。

二人は車へとたどり着き、今度は反対の位置で座った。

かかれ！

二人は祈った。そして かった。エンジンは爆音を奏でる。

よし！

後は。とヘッドライトを照らす。それはあくまでやってきていた。浮かび上がりを認めるまでもない。真つ赤なドレス。そして頭部は欠如。どこからどう見ても化け物である。

「なんなんだ！俺は何を轢いたんだ！」

弟はハンドルを叩いて頭を埋めた。しかし兄はとうに答えは出ていた。

「轢いちまえ！」兄は叫ぶ。「あれは人間じゃない！化け物だ！だから」

轢いちまえ！と兄はけしかけ、弟は叫びながらアクセルを目いっぱい吹かせてクラッチを離した。

急発進する車。せまる距離。寸でのところでそれは消えた。二人とも衝撃に備えて目をつむっていたのでその瞬間は分からなかった。

その後家に帰るまで何事もなかった。生首も出なかった。二人してその夜は眠れず、なぜ消えたのかを話し合った。二回目は厭だつたんだらう。これが二人が出した結論だった。それでも正体は分かるはずもなかった。

しばらく弟は実家に滞在した。あれだけのことがあったのだから当然だと兄は思った。それでもしばらくして、弟はまた出ていくことになった。兄は弟が出て行く前に、置きっぱなしの自身の車の回収のため、弟に呉田間駅まで運ぶよう頼んだ。当然弟は渋ったが、最終的に昼に行くことで合意した。

呉田間駅に着くと、圭太の車はそこにあった。キーは付けたままなのに盗まれないのは田舎らしい。

呉田間駅周辺は昼に來ると長閑であった。老人が主に出張り、みな農作業に従事している。それを横目で見ながら、圭太は自分の車に近づいた。

すると無人のホームにつながる階段に、老人が一人座っているの

を確認できた。老人は男で麦わら帽を眼深くかぶり、顔は分からない。右手をリズムよく振っており、圭太は釣りの動作を思い出した。「この車、あんたのかい」老人は訊いた。

「はいそうです」圭太は答えた。

「あぶねえよ？ キーつけたまんまで」

「すみません。気をつけます」

「あの車は？」

「弟のです」

「弟に言っとけ。うるさくてかなわんてのう。ここら夜に走っとるだろ？」

「はあ、たぶん」

「なら言っとけ。迷惑だつて」

「はい、すみません。でも、もう走らないと思いますよ」

「なんだ？ なんかあったか？」

「まあいろいろと。懲りたつていうか」

「んー？」老人は言つて、快活に笑つた。「お前ら、化かされたんだろ。ここらの狐はよう人お化かすから」

「狐？ ですか？」

「おう。俺もよく化かされた。あんたらもそうだろ？」

「ええ、たぶん」

「悪いことはできんのよ。で、その車、壊れとるから、業者呼んだ方がええぞ？」

「え？ 動かしたんですか？」

「だつて邪魔だもん。でも動かんかった。じゃ、俺あ行くわ」

「……」

「なんか？」

「いえ、釣り好きなんですか？」

「おう。よう分かつたな」

そう言つて老人は去つて行つた。どこから現れたのか、孫娘らしい女がそのあとに続いた。

車はやはり動かず、その場で修理に出した。修理が終わって、原因を訊くと、それは砂糖らしかった。それによりエンジンが焼きついてしまったのだという。修理代は高くついた。圭太はその代金を払いながら、狐でも機械は化かせないか、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8142m/>

呉田間駅周辺にて 怪事

2010年10月8日11時44分発行